京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十七卷　第一號

大正十二年七月一日發行

論叢

賣上稅の缺點……法學博士　神戸正雄

私經營統計概論……法學博士　財部靜治

文化的認識と歷史的認識……法學士　恒藤恭

時論

農村問題と其の救濟策……法學博士　河田嗣郎

說苑

『諸國民の富』のダブリン版に就て……法學博士　河上肇

歷史派經濟學發達の徑路……法學士　山口正太郎

公娼の前借金に就て……經濟學士　岡崎文規

中世末期に於ける村落の結合を論ず……牧野信之助

雜錄

米國の新關稅法に就て……法學士　高橋康順

新マルサス主義英語通俗書解題……理學士　山本宣治

アダム・スミス生誕二百年記念會記事……委員

歴史派經濟學發達の徑路（一）

山口正太郎

緒言

フリードリッヒ・リストに萠芽を發した實證的經濟學は十九世紀の後半から二十世紀の初頭にかけて獨逸の經濟學界を風靡した觀がある、そして現今に於ても猶自ら歴史派に屬するとは明言せなくても該派の衣鉢を繼承してゐる學者が少なくない、乍然哲學界に於ける批判的精神の勃興及び其純化は當然理論經濟學の改造を要求し、新しき見地から經濟學を建設しようとする氣運に達してゐる、此思潮に棹すべきは若き人々の使命ではあるが、それと共に從來の經濟學が經過した其足跡を仔細に檢討することは建設の準備行爲として更に必要の度の深きを感ぜしめる。

茲に討究すべき所謂歴史派經濟學は其範圍廣く、其諸著述は經濟原論として各種の部門を含んでゐるから、それ等を悉く討究することは此一少論文の爲し能ふ處ではない、そこで先づ研究の範圍を此派の代表者とも云ふべきロッシャー、クニース、及びシュモラーに限り、且つ歴史派經濟學の特徴を表せる方法論に就てのみ考察し最後に此派に對して加えたるカール・メンガーの批評を檢したいと思ふ。

一、ロッシャーの歴史派經濟學方法論

一八七四年萊府大學教授ロッシャーは大著「獨逸經濟學史」を出し、中世寺院法の研究から初めて當時迄の獨逸に於ける經濟思想の發達を叙し最後に『現今我國の各大學に於ける經濟學の主なる傾向は確かに實證的と云ひ得る、實證的經濟學は人間を、如實に描寫するもので、一定の國民國家、時代に屬する人間の、單に經濟的動機からでなく、種々の動機からする行爲を觀察する、偉大なる經濟學者が今迄陷つた誤謬たる抽象的方法は唯、研究の前提としての價値あるのみで、學理にとりても、實際にとりても大した價値あるものではない[1]』と云ひ更に又『眞の經濟學は細かき枝、深き根まで統計的に、且つ歷史的に基礎付けねばならぬ、特に獨逸の經濟學の任務とする處は、あらゆる地球上の外國民の狀態を深き理解と廣き愛を以て研究するにある[2]』と云つてゐる、今迄の經濟學は自然法的見解の下に獨斷的に、普遍法則を抽出し、且つ人間を以て經濟的動機にのみ終始するものと假定した、乍然現實の人間は常に冷靜に利害打算に基いて行爲するとは云ふを得ない、從て如實に人間を觀察する限り、他の動機を看過することは出來ない、抑も經濟現象は各時代、各國民を通じて萬古不易なるものではない、之を一律に經濟法則を以て規定することは、假令爲し能ふとするも甚だしく價値の乏しいものでなければならない、眞に經濟現象を理解し、經濟學を組織せんとする人は歷史的に、時間と空間とを限局して、然も常に實證的に個々の事實を觀察し叙述せねばならぬ、リストに萠芽を發した歷史派經濟學は種々の變遷はあつたが其要旨は此の點を出でない、當時、法學に於ても亦、實證的精神が旺盛であつて殊に、ザヴヰニー、アイヒホルンの歷史派の影響は大なるものであつた、ロッシャーは其講義要領の序文

1) Roscher, Geschichte der National Oekonomik in Deutschland. 1874. S. 1032-1033.
2) Roscher. a. a. O. S. 1047.
3) Roscher, Grundriss zu Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach geschichtlichen methode, 1843. Vorrede. S. V.

に於て『予の國民經濟學の方法はザヴヰニー、アイヒホルンの法學に於ける方法と同じ點に達した』[3]と云つたが、然し両者の類似の點は問題であつて、カール・メンガーは此類似は外形に止まり、其内容に於て、其精神に於て全く異る、ザヴヰニーは歴史を以て現制度の有機的組織を明瞭にし十八世紀の合理派の改革論者に對抗するに用いたが、ロッシャーの場合は之と異り何等斯かる目的なく、單に歴史を以て學理の説明に用いたに過ぎないと云ふ[4]、乍然カール・ウヰーランドの様にザヴヰニーと歴史法學とは截然別つべきもの[5]と考えロッシャーの言葉が單にザヴヰニー其人を指すのではなく歴史法學の方法論を一般に指稱したものと解すればカール・メンガーの非難は當らないと思はれる。

ロッシャーは經濟學の本質を次の如く述べてゐる『如何にして國富を增進すべきかと云ふ事は經濟學にとりて重大問題ではあらうが、然し經濟學の本質の問題ではない、經濟學は致富の術ではなく、如何に人間を判斷し、支配するかと云ふ政治的な學問である、吾人の目的は國民が經濟的見地に於て如何に考え、如何に欲し、如何に感じ、努力し、目的を達するかを叙述するにある』[6]彼は國家學の方法を二つに分け(一)哲學的方法、(二)歴史的方法となし前者は出來るだけ抽象的に、時間、空間に於ける偶然性を取り去つて概念を形成する方法で、後者は人類の發達を出來るだけ忠實に實際生活に從つて叙述する方法である。[7]國家學に於ける歴史的方法は乍然單に事實の叙述のみならず、各國民の發達徑路の中に存する等しきものを採り出して之を發達法則の名の下に包括することをも任務とするもので、此意味に於て歴史的方法は或程度の客觀的妥當性を有す

4) Karl Menger, Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der Politischen Oekonomie insbesondere. 1883. S. 200-209.
5) Karl Wieland, Die historische und die kritische Methode in der Rechtswissenschaft. 1910. S. 7.
6) Roscher, Grundriss Vorrede S. IV.　　7) Roscher, a. a. O. S. I.

るものである。[8] 國家學の一種たる國民經濟學は國民經濟に關する斯くの如き發達法則を探求する學問である。[9] から從て哲學的方法よりも歷史的方法によらねばならぬのである。

ロッシャーは彼の大著「經濟原論」に於ても亦、國民經濟學の本質を以て『國民經濟、經濟的國民生活の發達法則の學問』[10] なりとし『國民生活は本來一つの完き全體なるを以て、其各種の外的表現は內面に於ては密接な關係を有するものである、從て其外的表現の一種たる經濟生活を研究するには殘りの總ての方面を知らねばならぬ』[11]、國民生活は有機的生活であるから其一方面たる經濟生活だけを抽出し之を研究することは價値少きことになる、從て彼は經濟學を以て國家學の一方面に過ぎないことを常に念頭に置き、他の學問の成果を採り容れることを怠らなかつた長所があると共に、其範圍が徒らに尨大に失するの短所がある。彼は「原論」に於て「講義」と異る方法論の分割を唱えてゐる、卽ち「如何にあるか、又は如何にあつたか」を研究する生理學的方法、或は歷史的方法と「如何にあらねばならぬか」を究明する理想的方法とを嚴密に分ち從來の經濟學が科學でありながら理想的方法を採用するを非なりとし『我々は學理としては理想の建設を棄てねばならぬ、その代りとして採用すべきは第一に國民の經濟的本質及慾望、第二に經濟的慾望の充足を決定する諸法則、及び諸制度、第三に其效果、を單純に叙述すると云ふことである。卽ち國民經濟の解剖學と生理學とも云ふべきものである』[12] 從て常に現實に立脚し單に眞であるか僞であるかを決定するに止まり、自然科學の研究者と同じ態度を持すべきである、そして顯微鏡と解剖刀とを取扱ふ氣分を忘れてはならないのである。[13]

8) Roscher, a. a. O. S. 2.
9) Roscher. a. a. O. S. 4.
10) Roscher, Grundlagen der Nationalökonomie. 24 auf. 1906. S. 42.
11) Roscher, a. a. O. S. 42.
12) Roscher. a. a. O. S. 77.
13) Roscher, a. a. O. S. 77-78.

斯くロッシャーは經濟學の自然科學的態度を高調してゐるのであるが、然し彼の論旨、用語は不鮮明で微溫的で、カール・マルクスが『解剖學的、生理學的方法』を主張するロッシャーが折衷的態度を採れるを非難[14]した如く、ロッシャーの概念構成には頗る曖昧な言葉が使用され、時には右、時には左と全然相反することを主張することもあり、或は其中間を何等論理的意味なく獨斷的に折衷することがある、彼は曖昧な「類似」と云ふ語を使用する、即ち彼の方法論はザヴヰニーの歷史法學の方法論と類似すると云ふかと思へば、他の所では經濟學は博物學に於ける組織學と生物化學に類似し[16]自然研究者と類似せる方法を採らねばならぬ[17]と云ふ、更に又、他の處では經濟學の總論の部門は明かに數學的物理學と多くの點に於て類似すると[18]も云つてゐるから、彼の所說を約說すれば經濟學の本質なるものは或は法學、或は自然科學、或は數學、或は歷史、其他各種の科學と類似せるものとなる、あらゆる科學と類似せるものとは必竟それ自ら何等の特徵を有せないことを反面に物語つてゐるのでなかろうか、各科學との「類似性」Ähnlichkeiten をいくら多く集積しても、其結果として獨自性を有する一科の學問を創造するを得ない、一科の獨立せる學問は他に還元し得ない特徵の下に初めて成立し得る論理上の可能性を附與せれるのであるからロッシャーの如く類似性を說明するのみでは經濟學の特徵は表はれて來ない。

ロッシャーは抽象的、普遍的方法は或個所では『經濟學の前提として不可缺の研究方法』であつて[19]歷史的方法は此方法によつて補はれなければならぬ、と云ふかと思へば他の處では歷史的方法を以て唯一の正しき方法とし抽象的方法を排してゐる[20]、抽象的方法の價値はロッシャーにあつて

14) Karl Marx, Das Kapital. Bd I. S. 58. Volksausgabe. S. 55.
15) Roscher. Grundriss. S. V. Vorrede.
16) Roscher, a. a. O. S. 2.
17) Roscher, Grundlagen. S. 77.
18) Roscher, Grundlagen. S. 67.
19) Roscher. a. a. O. S. 68.
20) Roscher, a. a. O. S. 78.

は其個所によつて種々に評價せられてゐるので或時は相當に其重要さを認められ或時は全く排せられてゐる、更に又矛盾と思はれるのは科學に於ける實證的方法は本來多くの實驗を基礎として概念を構成するのであつて其實驗、或は經驗的事實相互の間に價値の差を附し得べきものではないのに係らず、ロッシャーは價値判斷を使用して取捨してゐる、從て彼の實證的方法は頗る不徹底であるとの譏を免れない、解剖刀と顯微鏡とを以て自然的事實を剖見する冷靜なる態度は價値判斷の愛憎の感情に左右されてゐる、更にロッシャーに於ては自然科學的因果の法則を使用する處もあれば、それと同時に目的論的解釋を併用してゐる多くの個所を發見する、此相容れざる二つの方法を何等の吟味なしに混然と採用してゐるのは嚴密なるべき科學者の態度ではない。次に歷史派經濟學は一般に眞理に對しては相對論 Relativismus を採り、時と處とに應じて眞理は相違せるものと考え絕對普遍の妥當性を否定する、ロッシャーも亦大體に於て相對論を採つてゐるが時々此主潮に反對して經濟學にも自然法則の妥當することのあるのを述べてゐる[21]、此點に於て又ロッシャーの態度の明瞭でないのを見る。

ロッシャーは其方法論の考察を「講義」では哲學的方法と歷史的方法とに分ちて試み「原論」では理想的方法と歷史的方法とに分割してゐることは前に述べた、果して之等の分割方法は適當であらうか、或論者は歷史的方法なるものは又、哲學的方法の一種に過ぎない、認識論的に見れば歷史的方法は一定の哲學に基くもので、決して哲學と矛盾反對するものではないから此二つの方法を對立せしめるロッシャーの方法論は正當でないと云ひ、更に第二の分類に就ては理想と歷史と

21) Roscher, a. a. O. S. 79.

は對立するものでなく、歴史を理想の方面から觀察することは不可能ではない、又現に歴史的理想主義と云ふ名もある如く両者は嚴密に對立し得るものと云ふを得ないからロッシャーの此分割は適當ではないと主張する。[22] 乍然此反對論は單に名稱の問題に過ぎないので、ロッシャーの歴史に對立する哲學的方法とは普遍妥當的な自然法則を求めるにあつて、個々の事實に立脚する歴史と此點で分つことは實質的に見れば不都合はないと思はれる、又過去、現在の事實の叙述たる歴史に對立せしむるに未來の斯くあらざるべからずと云ふ理想を以てすることも不可ではあるまい、哲學と云ひ、理想と云ふから歴史と截然區別し得ないと云ふならば他の適當なる名稱を以てすればよい、唯ロッシャーが「講義」に於けると「原論」に於けると其實質を異にせる方法論を採用し、統一がないから孰れに重きを置くかを知るを得ないのは遺憾である。

實證派經濟學にとつて問題となるのは意思の自由 Willensfreiheit を如何に取扱ふかと云ふことである。純客觀的の描寫に徹することを主旨とすれば此事は問題とするに及ばないけれどもロッシャーに於ては主觀の要素が多量に包含されて居り、然も彼が經濟學理に於ては絶對に理想的方法を排除すべしと云ひ乍ら、意識的にか無意識的にか、彼の原論に多くのゾルレンの主張が混じてゐるから、彼が意思自由の問題を如何に取扱つたかは考察せねばならぬ一問題である、ロッシャーは意思の自由は決して自然法を破るものではなく、寧ろ其反對に自然法の要素として其の中に、他の要素と併んで包含されてゐるものだと考えた、人類精神の本質は自然法に支配されてゐ

22) Lifschitz, Die historische Schule der Wirtschaftswissenschaft. 1914. S. 86.

るもので、個人の自由と責務とは當然自然法の支配の下にある、吾人が意思の自由と認めるものゝ中に自然法の行はれてゐるのを見る、從て意思自由に基く人類の行爲も亦自然法則の下に規定さるべきもので、此事は同一の形式の下に人類の行爲が表現されることによつても認め得る、斯くロッシャーは意思の自由をも自然法則の下に其要素として包含し得るものと解したが、然し他面に於て彼は自然法則を以て『人類の意思とは無關係』なるものと定義してゐる、卽ち人類の意思を以て左右すべからざる法則が自然法則であると云ふ、然らば人類の意思と全く無關係なるものが其構成要素として人類の意思を包含してゐると云ふのは矛盾でなかろうか、人類の自由意思を要素として內面に包含してゐるとすれば、其要素は一定せるものでなく常に變化し自由に動きつゝあるを以て、從て之等の要素から構成せられた自然法則も亦、常に變動するものでなければならぬ、卽ち人類の意思によつて影響せられなければならぬ、自由意思を包含しつゝ、之より超越したものとは形而上學的に斷定する以外には論理上不可能である。

次にロッシャーは理想的方法を經濟學理から排除して現實の凝視を基礎とし客觀的に經濟現象を解剖すべしと主張したから此立場に於ては彼は實現論者であるが、然し、人類の意思は環境を創造し得るや、或は反對に人類の意思は環境によつて支配さるゝにはあらずやと云ふ自由意思論對宿命論の問題に於ては彼は全く無反省に前者を肯定し、人類の自田意思は環境を變更し得るを以て、社會改良は人類の意思によつて遂行せられ、常に意思の活動に基いて新しきものが創造せらると云ふ觀方を採る、茲に於て彼は理想的方法を排除しながら無意識に之を採り容れてゐる。

宿命論に對して自由意思論を採る人は常に目的觀を內に藏して冷靜なる自然因果以外に理想の炎の胸中に燃え上がるものである、ロッシャーは現實論者でありながら理想を逐ひ、目的觀を有し社會改良を念頭に置いてゐるから彼の頭腦には相容れざる二つの方法が無考察のまゝ取り容れられてゐるのであるが、茲にもロッシャーの態度が論理的に嚴密でないのを見る。

哲學上、萬古不易の眞理なしと主張する相對論者に對して、然らば斯かる眞理なしと斷言し得るのは、眞理なしと云ふ一つの眞理に基くのではないかとの反對論が絕對論者によつて提起せらるゝ如く、經濟學上に於ける歷史派の人々が眞理は時と處とを異にするによつて異り絕對の眞理なるものなしと主張し乍ら歷史的方法を眞理獲得の唯一の方法なりと斷定するは矛盾である、歷史派の人々が相對論を徹底せしめようとすれば、歷史的方法が經濟學に於て、時と處とを絕した完全な方法であるとは云ひ得ない、彼等の主張する歷史的方法は單に一種の方法としての相對的意義しか有せないと自ら告白せなければ自家撞着を脫するを得ないことになる、歷史派經濟學なるものは彼等が大聲叱呼する程、大なる價値を有せないことを彼等自らが人々に告げなければ、彼等自身の學說が成立し得ないとは何たる滑稽であろう。[23]

私は以上で歷史派の先驅者たるロッシャーの考察を止め、次に此派に於て最も重要なるクニースの方法論の吟味に移ろうと思ふ。

二、クニースの「歷史的立場より觀たる經濟學」

23) Lifschitz, a. a. O. S. 105.

クニースの當時に於て科學分類論の主なるものは、觀念の世界を研究の對象とする精神科學と感覺に訴ふる外界の世界を對象とする自然科學との分類であつた。クニースは此分類を不足なりとして、第三の種類、卽ち國家學と社會學とを附加した、經濟學は此第三の種類に屬すべきものであつて此種類は多くの個人又は國民が社會的規制の下に統一されて共同生活を營む處の人類の行爲を以て其對象とする、從て外部の世界に表現せられ感覺に訴ふる事になるから精神科學には屬せない、さればとて自然科學でもない、何故ならば假令感覺の世界に屬してゐても其人類行爲の發する源は實は內的の精神作用であるからである、其源は精神作用で唯其表現のみが感覺世界に訴へる人類行爲を研究對象とする科學は全く第三の世界を構成すべきものである。[24]

斯樣に精神科學にも自然にもあらざる經濟學は、次に、如何なる方法によつて其研究の步を進むべきであるか、クニースは從來の經濟學があらゆる時、あらゆる場所を通じて妥當すべき自然法則を認むる絕對論的態度を採れるを非難し、其世界主義（場所的）と永久主義（時間的）とを以ては到底經濟現象を眞に說き得べからずとして、[25] 歷史派經濟學の根本基調たる歷史的方法を次の樣に提唱してゐる「經濟學の絕對主義に反對する歷史的見解は次の原則に基く。經濟上より見たる生活狀態及び、それを說明すべき經濟學は、その形式、その形態、その立論、及びその結末等總て歷史的變遷の結果である、各國民の經濟的生活狀態及び、それを說明すべき經濟學は人類の歷史に於ける一時代と有機的關係に立つもので、時間、空間、國民性等の條件の下に發生し、漸次に進步するものである、經濟學は其立論の基礎を歷史上の生活に得、其結論を歷史的方法によつて導

24) Knies, Die Politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte. 1883. S. 6.

25) Knies, a. a. O. S. 24.

くべきもので、經濟學の法則とは歷史的叙述と眞理の進化を表現することである。……經濟學に絕對主義の行はるゝは歷史的發展の一時代の上にのみ可能であつて其時代の產物 ein Kind dieser Zeit に外ならぬ』[26] 各國民は領土を異にし經濟的條件に於て甚しき相違がある、氣候の差は各國民の勞働能力に相違を來し土地の豐饒の度、廣さ、四圍の狀況、世界交通場裡に於ける位置等は各國民の經濟事情をして其國特有のものたらしめる、從て經濟現象の觀察は此特殊性を基礎とすべきもので、普遍性抽象性は價値がない。[27] 經濟現象の特殊性は以上述べた自然的條件によつて影響を受けるのみならず文化的施設によつても又影響されるものであつて、一國の立法、行政、宗教、思想界の狀態は國民經濟に變化を及ぼすものである。[28] 經濟生活は國民生活の經濟的な一方面に過ぎないのであるから、從て經濟生活を研究對象とする經濟學は決して孤立したものでなくて他の學問と密接に關係し、其影響を受けてゐるものである。[29]

クニースの原論は第一篇『序論』第二篇『國民經濟』第三篇『國民經濟學』に分たれ、第一、二篇で彼の歷史的立場を述べ第三篇で科學としての國民經濟學を構成してゐるが、方法論的考察より觀れば此第三篇が最も重要である。

彼は第三篇の冒頭に於て、總ての科學は三つの點より先づ考察せなければならぬ、第一は研究の範圍で、第二は其科學の任務、第三は方法であると云ふ。國民經濟學に於ては其範圍を限定するため、私經濟學と分離せねばならぬ、私經濟は獨立した個々の單位の經濟であるが國民經濟は

26) Knies, a. a. O. S. 24-25.
27) Knies, a. a. O. S. 44-61.
28) Knies, a. a. O. S. 106 ff.
29) Knies, a. a. O. S. 141.

之等の私經濟相互の結合を全體として觀察したものである、私經濟は他面から見れば其經濟生活なり經濟行爲なりは一時的のものであるが國民經濟では繼續的な、時には數時代に亘つた生活、或は行爲として現はれる。從て兩者は嚴密に分離すべきもので、之を分離することによつて國民經濟學の範圍は明瞭となるのである。[30]

從來の經濟學には前提として二つのものが含まれてゐる。一つは私有財產制度で、他は利己心である。從來の經濟學者は此私有財產制度と利己心とを以て絕對的なもので、到る處、又、あらゆる時に妥當するもので此二つの前提の下に初めて經濟學が成立すると說いてゐる。クニースは之に反して、此二つ共、歷史上の現象であつて決して不變なものでない、時代の變遷は此兩者に大なる變化を與え、時には之を否定することも起るべしと云ひ、此兩者とも經濟學に於ては論理上の範疇ではなく、單に歷史的範疇に過ぎないと主張する。[31]

國民經濟學は分配組織を論ずるが、其際其組織の良否、公平なるや否や等の判斷をする、分配組織の問題で經濟學が今まで變遷して來たのに徵して明かである如く、自然科學の樣に普遍性や決定論的態度は經濟學の本質を構成せない、乍然經濟學も科學である限り、現象の因果關係を闡明する法則を有せなければならぬ、然らずんば單に智識の集積に過ぎなくなるからである、經濟生活は人類の生活の一面であるから自然現象の必然性のみでなく、其處には自由が問題となる人類を生物的存在を見る限り、時間と空間に制限せられ自然現象となり、土地の生產力、水力、蒸汽力等と同じく自然の一活動力となつて自然法則の因果性の支配を受ける。[32]

30) Knies, a. a. O. S. 160-161.
31) Knies, a. a. O. S. 180. 223.
32) Knies, a. a. O. S. 351, 352.

乍然斯樣な自然法則は經濟學上の法則ではなく、經濟上の現象に妥當する自然の法則に外ならぬ、或は經濟的事實の自然法則的要素 naturgesetzlichen Faktor in der wirtschaftlichen Jatsache. とも云つてよかろう。[33] 經濟學は自然現象と共に人類の精神生活をも取扱ひ、然かも後者に重きを置くから從て人類の歷史に基く經驗の結果を重要視し、此の中から經濟學に所謂法則を導いて來なければならぬ、歷史的經驗から法則を得るとは所謂『發達の法則』を導くことである。[34] 此法則は時間と空間に制限された或範圍內に於てのみ妥當するもので、多くの國民を比較すると、其處には類似せる點と相違せる點とを發見する、其類似せる點は自然科學に所謂、等しい、と云ふ程、嚴密なものではない。此類似の點を時間の經過から見て、發達の類似性を得て茲に發達の法則を發見する。從て時間と空間とに於て制限せられ、足一歩、此制限を出ると相違性が直ちに肉迫するものである。[35]

以上述べ來つたクニースの方法論は次の樣に要約することが出來る。

經濟學は歷史的科學であつて自然科學ではない。自然科學にあつては「自然法則」を求めるが、經濟學に於ては「發達の法則」を探求する。自然科學の法則は「等しさ」と「絕對性」を要求するが、經濟學のそれは「類似性」と「相對性」とで足る、又自然科學では「必然性」を主眼とするが經濟學では之と両立せない「自由」の問題を取扱ひ、從て又「目的の設定」と云ふ目的論的態度を有する。要するに經濟學では經驗的、歷史的 empirisch-historisch 方法により孤立的抽象的方法に據るべきで

33) Knies, a. a. O. S. 352.
34) Knies, a. a. O, S. 361.
35) Knies, a. a. O. S. 477-480.

はない。

クニースの以上の如き方法論に對して或學者は彼の著『貨幣及信用』に於ては毫も歷史的色彩を認むるを得ず、從て彼の歷史派の主張は彼自ら事實上之を裏切れりと云ふ、斯樣な事實上の矛盾の點は姑らく舍き、論理上、果して彼は矛盾なきを得たであろうか、彼の方法論は、徹底的に方法なく實施し得られるものであろうか。或論者は次の樣に云つてゐる。

抑も人間の思惟能力は同時に多くの事項を考えることは出來ない、必ず或る一つの事項を抽出して考えねばならぬ、そして多くの事項は時間の經過と共に連結して考えられるに過ぎない、經驗によつて如何に多くの事實、材料を蒐集し來つても、之を多くの方面から同時に考究することは人類の能力としては出來ないことである、そこで例へば賃銀の法則を求めんとする時には、多くの材料から唯賃銀に關する方面のみを抽出して來るので、其際は地代、利子、人口の關係とか其他萬般の經濟事情は一時看過せなければならぬ、歷史的經驗的方法と雖も此意味に於ては決して抽象的方法を無視するを得ない、否、寧ろ抽象的孤立的方法あるによつて初めて經驗的方法が其效果を充分に發揮し得るのである。[36]

乍然此非難は少しく當を失してゐる、人類の認識過程に於ては同時に數多の事項を認識し得ないのは自明の理ではあるが、さればと云つて一つの事項のみを孤立的に抽出して來ることは經驗的、歷史的方法が抽象的、孤立的方法に屈服した事にはならない、此二つの方法が對立するのは既に經驗的事實が認識の過程に於て成立して以後のことである、方法論の論爭の行はれるのは經

36) Lifschitz, a. a. O. S. 174. 175. Lifschitz, Untersuchungen über die Methodologie der Wirtschaftswissenschaft 1909. S. 40, 41.

驗的事實を更に如何に取扱ふかに就てゞあつて經驗的事實成立の認識過程に就て論ずるのではない、認識過程に於ては總てが孤立的抽象的になるのは人類の認識能力上、不止得ることであつて時を同うしてあらゆる關係を考察し得ないから孤立的方法は免れない。非合理的な認識素材そのものは經驗的事實ではない、後者が成立するためには云はゞ Gesetze der Empirie überhaupt に制約せらるゝことを要するのであつて、此法則は然かも經驗そのものより發生するを得ざる先天的のものである以上、如何に具體的立場を固守する歷史派の人々と雖も一般法則の妥當を排除するを得ない、乍然歷史派の人々の主張は認識過程に迄、侵入するものではない、其方法論は少くも抽象的學派に對抗せんとする限り、そは經驗的事實、換言すれば科學の材料を如何にして整序し、獨立したる科學を構成すべきやにあるので、前揭論者の反對論は的を失してゐると云はねばならぬ。

歷史派經濟學の成立の頃は英國正統學派の抽象的方法の全盛の時であつたから之に對する實證的方法の高調が此派の主眼點であつた。然るに時代の變遷と共に抽象的方法を以て經濟學を建設せんとするものに數理學派なるものを生ずるに至つた。茲に於て此派に對しても亦、歷史派は攻擊の矢を放たずには居られなくなつた。茲には先づクニースが數理學派の代表者として擧げたレオン・ワルラ Léon Walras の主張を聞いてみる。

一般に經濟學と總稱する學問の中には性質を異にする二つの學問が含まれてゐる。一つは純理

經濟學 Economie politique pure で他は應用經濟學 Economie politique appliquée である。應用經濟學は如何にになさねばならぬか、如何になすがよきかを研究するもので、例へば如何にして國富を增進すべきかと云ふ問題は之に屬する。前者は之に反して社會の富は如何なるものから成立するかと云ふ Théorie de la richesse sociale や交換の學理 Théorie de l'échange を說明する。物價の騰落、國民經濟の發達に伴ふ利子步合の高下等の問題は之に屬する。數理學派の經濟學は應用經濟學の範圍に及ぶには多大の困難を伴ふけれども純理經濟學の範圍に於ては最も精確に經濟現象を說明することが出來る。文字の代りに數學や數學上の符號を使用し、論理の代りに計算が使用せられることゝなる。斯くの如くにして普通の論理よりも遙かに精確なる結果が得られ、從て此方法を採る限り現實の物的事實を顧る必要はない、數理的方法は合理的であつて經驗的方法ではない、La méthode mathématique n'est pas la méthode expérimentale, c'est la méthode rationelle.[37] 數學的符號を普通の文字に飜譯すれば絕對的に精確な結論に達する。

數理學派の人々は自己の職務を以て物理學者が振子の運動を觀察するのに比して物理學者は眞空內に於ける振子の運動を研究するが數理學派の經濟學者の現實の雰圍氣內に於ける運動、卽ち摩擦力を有する空氣の抵抗のある運動を觀察するが如きものであると云ふ、乍然振子の運動の如きは眞空內に於けると普通の空氣內に於けると假令差はあるにしても、經濟學理の抽象性と經濟現象の現實性とに於ける程の大差はない。經濟現象の說明に於ては到底空氣の摩擦力の如き僅少な現實性に止まるものではない、例へば價格が如何にして定まるかの問題も數理學派の人々の考

37) Walras, Élements d'économie politique pure, 1874. p. 32.

ふるが加く抽象的に決定せらるゝにあらずして、其社會の雰圍氣によつて非常に影響せらるゝもので、數理學派の考ふる樣な何等の障害のない自由放任の社會なるものは事實存在しない、社會は一定の歷史的法制の下に、種々の制限束縛を有し、種々の特殊相を表現してゐる、從て其雰圍氣の下に發生する經濟現象は頗る特殊性に富み單なる數學上の式を以て整序することを得ない假令、整序し得としても、それは事物の外面に止まり事の眞相、本體を捉えたりと云ふを得ない[38]人間は利己心と云ふ唯一の動機によつて行爲を初める譯ではない、之を正反對に愛他心、共同心の發露による場合も甚だ多い、恰かも數學上何等の說明を要せずして、總ての推理の前提となり基礎となれる公理に比すべき一二の動機から總ての經濟現象を推論しようとするのは現實の社會を眼中に置く限り妥當とは云ひ得ない、人間は社會あるによつて初めて眞の人間たり得るものであつて、然も其人間たるや之を個々の部分に分解しては人間たり得ざるもので、全く統一したものである、此統一したる人間の行爲を數學的に分析して研究することは決して眞相を捉え得るものではない。[39]數理學派の人々は又數學上の分析や代數學上の方程式の計算によつて新しい事項が發見されるやうに說くが、事實上經濟學の智識は斯くの如き計算によつて新しく附加せらるゝものではない。

以上でクニースの名著「歷史的立場より觀たる經濟學」の要點を考察し了へたのであるが此書物の我々に示唆する範圍は甚だ廣く、上述以外更に多くの點を研究せなければならぬけれども、又クニースの研究としては彼の他の著述「貨幣と信用」にも論究せなければならぬが、茲には唯歷史派經濟學、殊に方法論より觀たる該派の要領を考察することを主眼としたから、以上でクニースを終り、次に新歷史派の首領シュモラーの方法論に及ぼうと思ふ。(未完)

38) Knies, a. a. O. S. 504, 505.
39) Knies, a. a, O. S. 505.